

名古屋大学附属図書館 2005 年企画展

はなし

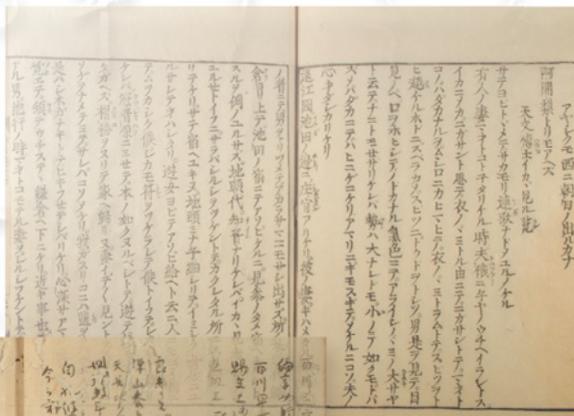
説話の書物

小林文庫本を中心に

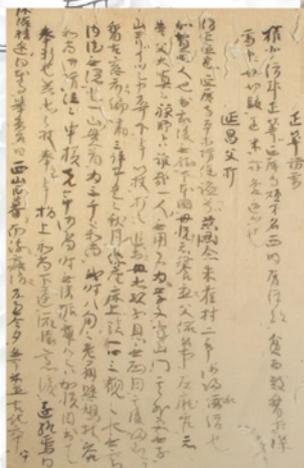
平成17年 6月17日金 7月8日金



宝物集



沙石集



内外因縁集

名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室

目 次

企画展開催にあたって.....	1
説話の書物は語りかける.....	2
説話と唱導.....	3
コラム（1）中世の葬送	
コラム（2）恐怖の外食	
世俗説話の世界.....	13
コラム（3）中世の女と男	
尾張国長母寺と無住.....	21
コラム（4）近世の無住思慕者、山雲子	
説話の継承と展開.....	28
コラム（5）説話と入試	



小林忠雄氏略歴

明治41年8月1日 小林兼松・かねの長男として愛知県東春日井郡志談村（現・名古屋市守山区吉根）に出生。逓信局勤務等を経て日本大学の夜学に学び、尾張中学・尾張高校教員、旭丘高校教員、瀬戸高校教員を歴任。昭和35年7月19日死去、享年52歳。吉根観音寺墓地に葬る。法名忠誠良義居士。

企画展開催にあたって

名古屋大学附属図書館には、国文学者小林忠雄氏（1908-60）旧蔵の説話文学関係古典籍673冊が小林文庫として保管されています。説話とは、神話や仏教靈驗譚から滑稽卑俗な世間話までをも含む、さまざまに語り伝えられ、書き継がれてきた話ですが、小林文庫は、主要な説話集について数多くの版本・写本を集めた学術的価値の高いコレクションとして知られています。

名古屋大学附属図書館及び同研究開発室では、本年6月18日、19日の両日、名古屋大学において説話文学学会の大会が開催されることを機に、名古屋大学文学研究科及び説話文学学会との共催で、小林文庫を中心とした「説話（はなし）の書物」と題する展示会を企画しました。さまざまな話を通して語られる古人（いにしえびと）の生活感覚や生きる知恵など、説話集の豊穡な世界にふれていただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の企画に特段のご協力をいただきました名古屋大学文学研究科の阿部泰郎、塩村耕両教授はじめ、関係各位に厚くお礼申し上げます。

2005年6月

名古屋大学附属図書館長
附属図書館研究開発室長
教授 伊藤 義人

説話の書物は語りかける

いにし 古え人は語り 八ナ 咄すことを大いに好みました。世間のことども、人間のしわざ、みな口語りによって伝えたものでした。民の炉辺の昔語りから、寺の高座説法まで、至るところが語りの場でありました。『源氏物語』や『平家物語』など、さまざまな物語を生み出す基盤もまた語りにもありました。

鎌倉時代の『宇治拾遺物語』の序文に、そこに集められた物語についての、こんな一節があります。「天竺の事もあり、大唐の事もあり、日本の事もあり、それがうちに、たふと 貴き事もあり、おかしき事もあり、怖しき事もあり、哀なる事もあり、きたなき事もあり、少々は虚物語もあり、利口なる事もあり、さまざま やうやうなり」それは、都の貴族、大納言源隆国が、宇治の別荘で往来の人に物語を語らせて「大きな草子」に書き留めていたという、今は失なわれた『宇治大納言物語』成立の光景を中世に仮想した詞の一節ですが、そこに、語りによってとらえられるものは何か、ということがかたど 象られているように思います。語りによる伝承が創りだす文芸のはたらきの総体を、いま「説話」と呼びます。説話こそは、すぐれて世と人とを映しだす鏡といえましょう。

その説話は、書き留められて、書物として後の世に伝えられました。そのとき、語りはただ文字化されるものではありません。集められることにより、それはおのず 類をなし、相互につながりを生じ、連想の輪が広がっていきます。そうして編まれた説話集は、中世に至って編者の思想を体現する一箇の作品ともなり、近世には版本として刊行され、あらたな文芸創造に影響を及ぼすものともなったのです。

そうした、説話の書物が蔵している豊かな世界をあらためて見直すために、今回、名古屋大学で説話文学学会が開催されることを契機として、本学附属図書館小林文庫に所蔵される説話関係文献を中心に展示を試みました。とりわけ中世寺院の談義本や、近世の流布と享受のありかたを示す挿絵入りの版本など、興味深い説話の諸相がうかがえる書物が含まれます。小林文庫は、名古屋における説話研究の先達というべき小林忠雄氏（1908～1960）の収集になるもので、氏の没後、その蔵書を名古屋大学文学部国文学研究室が購入したものです。

戦後の名古屋の地で、国文学とりわけ中世文学研究が盛んになり、研究者が輩出したさきがけを氏の学問は成しておりますが、その礎となつた集書でもありました。そのうち幾つかは学術書に翻刻紹介されたものもあり、学界周知の書物でもありますが、この展示を通して、説話が書物を介して語りかける、古え人の生の息吹に触れていただければ、と願っております。

平成17年6月

名古屋大学文学研究科教授（比較人文学）

阿部 泰郎（あべ やすろう）

本図録の解説は、文学研究科大学院生（日本文学）の岡山高博と大原郁朗が担当し、書誌とコラムは同教授（日本文学）塩村耕が執筆しました。

説話と唱導

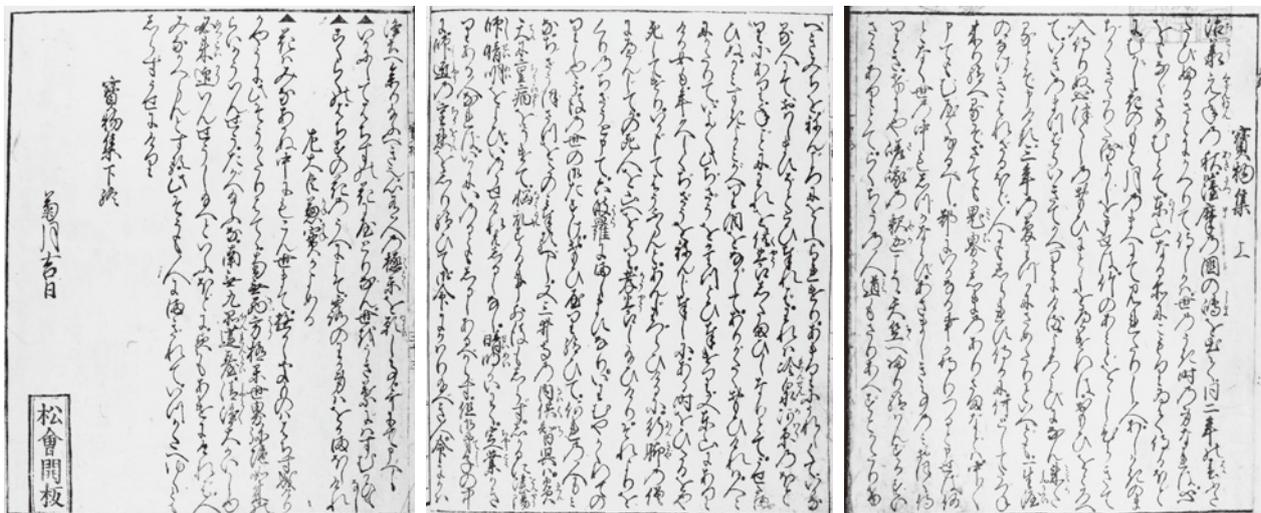
律令体制の崩壊にともない、荘園からの収入の減った寺社では財政問題が深刻化しました。そこで、堂塔の維持や修復の費用などを、在家からの喜捨によって賄うために活躍したのが勸進・説教の聖たちです。彼らは巷間に出て念仏や作善を促し、寺社の縁起や本尊の靈験を説いてまわりました。そのような唱導の場では、興味深い話題や巧みな話芸、聴衆に応じた機知が欠かせません。そして、唱導で語られた話が説話集として書き留められました。いっぽう、書き残された話は、さまざまなアレンジが加えられ、語り継がれます。そのように変容を繰り返すことが、説話の本質でもあり、その結果、さまざまな異本が生ずることとなりました。

ほうぶつしゅう 『宝物集』

成立は鎌倉初期。平康頼著。鹿ヶ谷の陰謀で鬼界が島に遠流となり、恩赦で帰京後、清涼寺釈迦堂へ参詣した主人公が、参籠者たちの対話を聞き書きする形で物語が進行する。仏道こそ世の宝であること、六道の苦、成仏するための十二門を説く。その後の説話集や説法唱導に大きな影響を与えた。伝本は 1 巻本系、 2 巻本系、平仮名古活字 3 巻本系、平仮名整版 3 巻本系、片仮名古活字 3 巻本系、第 1 種 7 巻本系、第 2 種 7 巻本系に分類される。

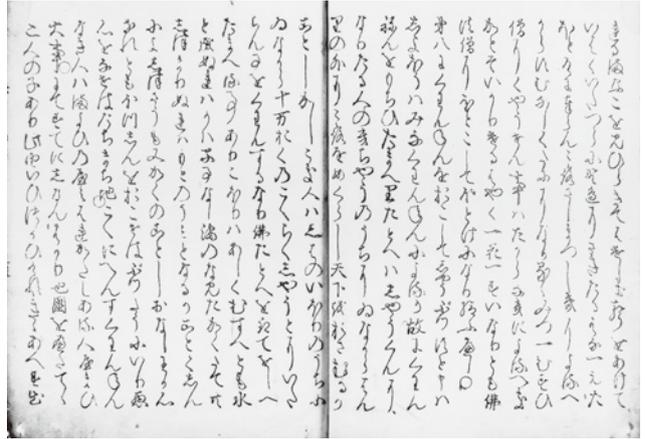
[1] 『宝物集』(小林 - 101)

版大 3 巻 3 冊 (27.2×18.8)。原題籤(左肩双辺)外題「絵入 宝物集」(下巻は剥落)。内題「宝物集 上(中・下)」。本文末刊記「菊月吉日 松会開板」(刊年記削除)。四周単辺 15 行。漢字かな交じり。絵入り。原裝濃緑色表紙、記繫・牡丹唐草文(空押)。江戸版。料紙濃返風。本文は平仮名整版 3 巻本系。* 近世前期刊



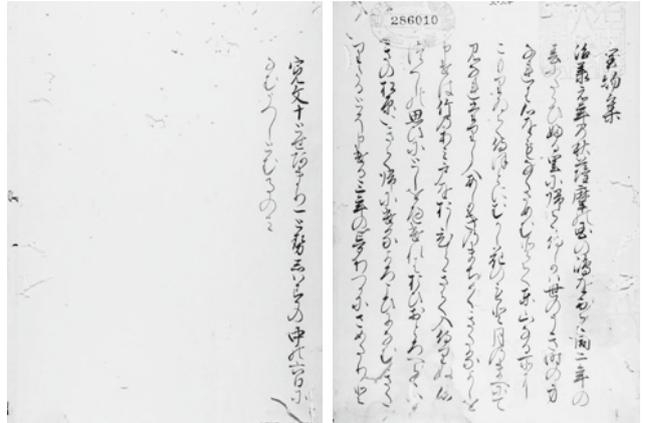
[2] 『宝物集』(小林 - 104)

版大1冊(26.6×18.9)。全3巻のうち下巻のみの零本。外題欠。内題「ほうぶつしう下」(1丁目は内題部分のみ存)。古活字版。無辺無界12行。漢字かな交じり。原装栗皮色表紙(破損大)。落丁あり。本文は平仮名古活字3巻本系。*近世初期刊



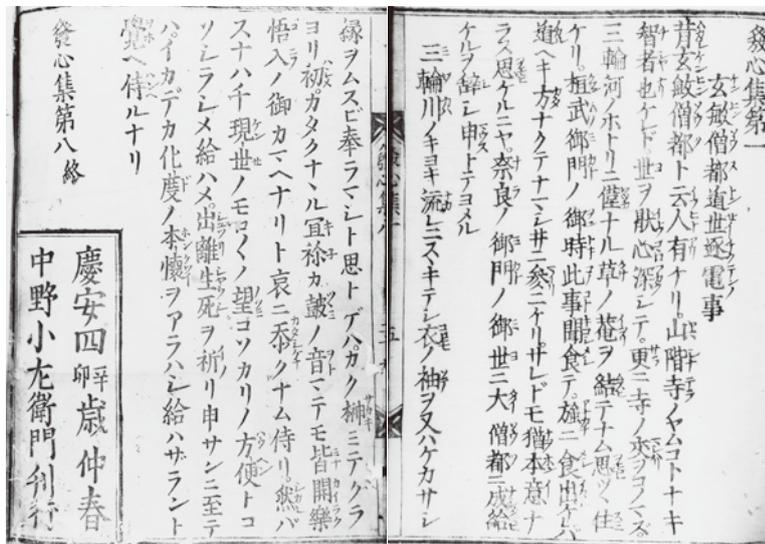
[3] 『宝物集』(小林 - 98)

写半1冊(24.0×17.7)。全3巻のうち上巻のみの零本。原題簽(中央無辺)外題・内題「宝物集」。巻末書写識語「寛文十とせあまり一とせしはずの中の六日になむうつしとむるのみ」。半丁10行。漢字かな交じり。原装墨色表紙。本文斐楮交漉、所々に唐草文・紅葉文等の下絵あり(代赭色刷)。本文は平仮名整版3巻本系。*1671



ほっしんしゅう
『発心集』

鴨長明著。建暦2(1212)年~建保4(1216)年頃の成立。発心・遁世を主題とした説話集。理想の遁世者像を描く一方、妄念に迷う人間の姿を鋭く照らし出す。「心」を書く営みこそ、執着と信仰の狭間を生きる長明の表現であった。巻6には数寄説話、巻8の末には神明説話を連続して収める。巻7、8は後人による増補かともいわれる。神宮文庫・素行文庫に、独自の神明説話を4話収める5巻本の異本が存在する。



[4] 『発心集』(小林 - 18)

版大8巻8冊(25.9×17.1)。原題簽(左肩双边)外題「長明発心集」(一部破損あり)。序題・目録題・内題・柱題「発心集」。自序あり。最終丁裏左下隔双边枠内に刊記「慶安四辛卯歳仲春/中野小左衛門判行」。四周双边10行。漢字カナ交じり。原装褐色表紙。早印。巻5は取り合せ(やや後印、識語「円月主(墨印)」)。*1651

入々ニ語テ弥此地蔵ヲ尊ビ奉リケリ又東山
 二貧女アリケル年來地蔵ヲ念ジ奉リシ近キ
 マニ波羅ノ地蔵ヘ常ニ参リケル此女年老タ
 ル母ヲ持タリケルニ或時老母死テケリ如何
 葬ニト案ジ煩ヒ只一人マモラヘテ泣居タリケル
 程ニ或片夕暮ニ行脚ノ僧一人出來テ何事
 室物集 卷三 九一
 三角ハ數キ給フト問ケレバ事ノ子細ヲ有ク僂
 ニ語リケル僧是ヲ聞テ冥易事ニコソ侍ルナ
 レトテ指寄テヒシクトシタメ背ニカキ負テ
 山ヘ送り孝養シ給ヒケリ此女嬉シサ云ハカリ
 ナレ其後此僧永ク見ヘサリケリ是ハ則チ六
 波羅ノ地蔵ノ為給ヘルト思テ思ノ明ケル時参
 リテ拜ミ奉リケレバ地蔵ノ御足ニ土打付テツ
 オハシレケル其ヨリシテ此地蔵ヲ山送ノ地蔵
 ト申マツ細ニハ地蔵ノ験記ニツ申シタマル

掲出の図版は元禄6年版の7巻本『室物集』です。「又東山二貧女アリケル…」以下に京都六波羅の地蔵の靈驗譚が記されます。僧は死骸を「背二カキ負テ山へ送り」とあります。棺桶のない場合の葬送は、背中合わせになるように背負いました（江戸期にはこれを釈迦の勧進に見立てて「釈迦にない」と言いました）。ここもきっとそうしたのでしょう。「山へ送り」の「山」は、関西では今でも火葬場に行くことを「山へ行く」と言いますが、その「山」ですね。

さて、これを読んで現代の我々が不思議に思うのは、なぜこの女は泣くほど困っていたのか、ということです。ほかに家族も金もないならないで、自らの手で母を葬ればよいではありませんか。さらにまた、僧が母の死骸を背負って葬地へ運んでくれたことに対して、女は手伝おうとも、一緒に送ろうともしていないように見うけられます。いったいどうしてなのでしょう。

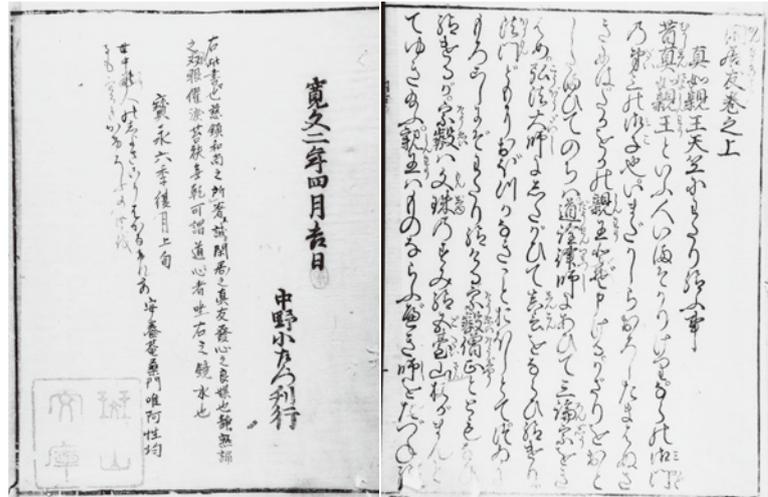
これは当時の葬送習俗にあって、女性は死骸を運搬することはもとより、野辺送りに参加することもなかったからだと考えられます。そのことは後世に受け継がれ、近世期の文献に見える事例を見ても女性は一般に葬列に加わりません。現代でも、そのような習俗が残っている地方があります。説話集の中には、ほかの文献には中々書き残されにくいような、当時の日常生活における何気ない現実が表現されており、そのことも大きな魅力となっているのです。

かんきよのとも
『閑居友』

承久4(1212)年春に完成。著者慶政は名門九条家の出身で道家の兄。幼少時の事故で身体が不自由となり、出家したと伝えられる。上巻は有名無名の遁世者の逸話を収め、下巻は女性を主人公とした説話が多くを占める。女性を主人公とした説話が多いのは、高貴な女性のために編纂されたからであろう。死と肉体の不浄の相を克明に描き出す説話を含むことは、慶政の不幸な事情と密接な関係があるとされる。伝本は少なく、中世以前にさかのぼる写本は尊敬閣文庫蔵伝為相本と卷子零本のみ。

[5] 『閑居友』(小林 - 63)

版大2巻4冊(27.0×18.0)。原題簽(左肩双边)外題「友」(2・3冊目、僅かに存)。目録題・内題「閑居友」。柱題「閑居」。最終丁裏に刊記「寛文二年四月吉日/中野小左衛門刊行」。四周单边11行。原装墨色表紙、疋繫地に菊花・牡丹(空押)。印記「守静蔵書」「林氏蔵書」「斑山文庫」。識語「右此書也慈鎮和尚之所著誠閑居之真友発心之良媒也静熟誦之則双眼催涙苔袂無乾可謂道心者坐右之鏡水也/宝永六季復月上旬 安養庵桑門唯阿性均/世中て人のしよさこそはかなけれあるも空きかけろふの世を」。本文は乙類。*1662

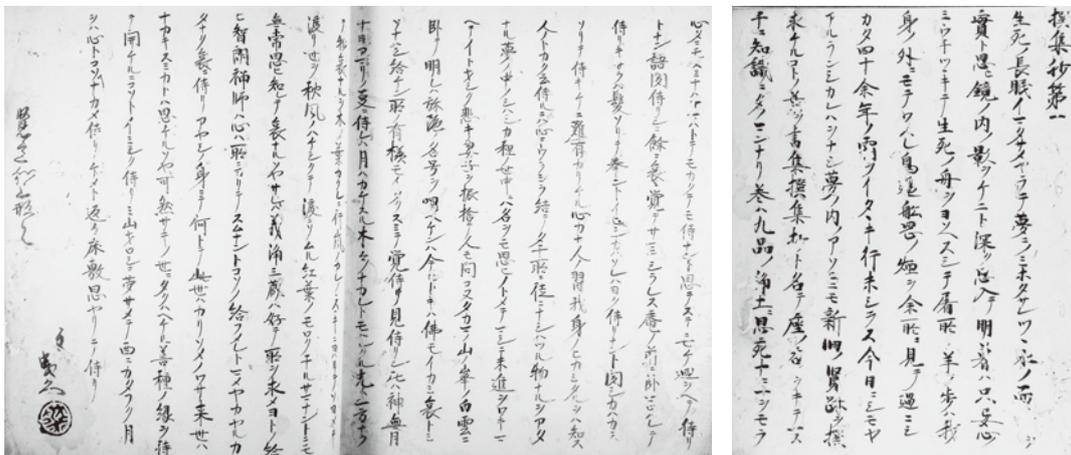


せんじゅうしよう
『撰集抄』

編者未詳。13世紀後半頃の成立か。語り手を回国修行する西行に仮託し、さまざまな隠遁者たちとの出会いと邂逅の中で、信仰のあるべき姿を表現する。歌人西行にふさわしく、詩歌にまつわる説話も多い。説話集のうちには神明説話を明確に位置付け、王法仏法を神明が擁護することが語られる。伝本は 松平本系、 鈴鹿本系、 書陵部本系、 静嘉堂本系に分類される。ほかに伝本からの抄出によって成立した改編本である略本がある。

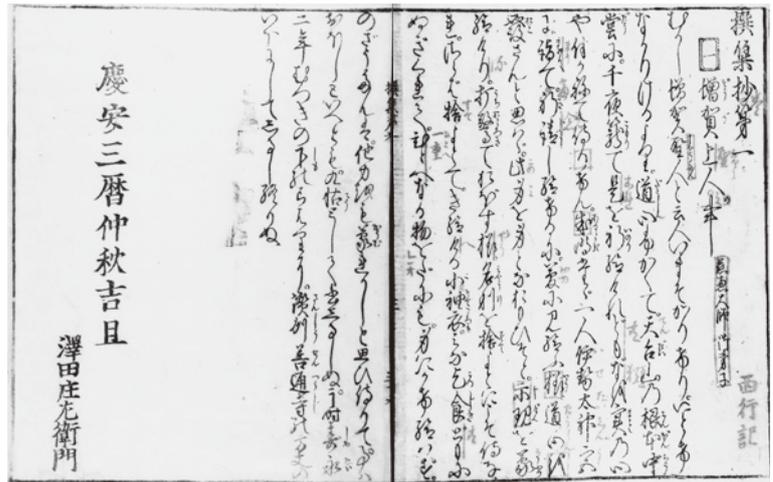
[6] 『撰集抄』(小林 - 119)

写半1冊(24.0×20.3)。全3巻のうち上巻のみ存(上之一~三存)。内題「撰集抄」。後筆の書外題同。10行。漢字カナ交じり。改装渋色表紙。本文斐楮交漉。虫損あり(総裏打本)。本文末に別筆の識語「賢意和上形見 主 曳久(墨印)」。本文は書陵部本系。*室町時代未填写



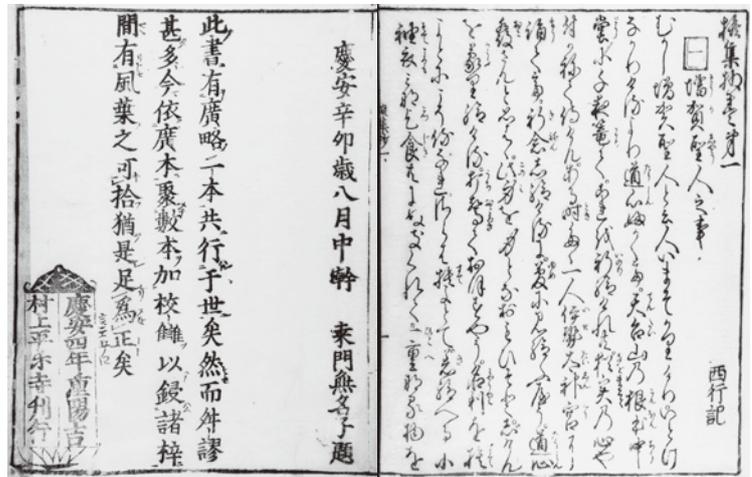
[7] 『撰集抄』(小林 - 121)

版大全 9 卷 5 冊(25.5×18.1)。原題簽(左肩双边)外題・序題・目錄題・内題「撰集抄」。柱題「撰集」。自序あり。序・目錄卷首「西行記」。卷末に刊記「慶安三曆仲秋吉旦 / 沢田庄左衛門」。やや後印。四周单边11行。漢字かな交じり。原装濃色表紙。朱書校合書入あり、卷1末に校合識語「昭和十五年一月二十日以慶安四年刊本校合了 小林忠雄記」。本文は静嘉堂本系。*1650



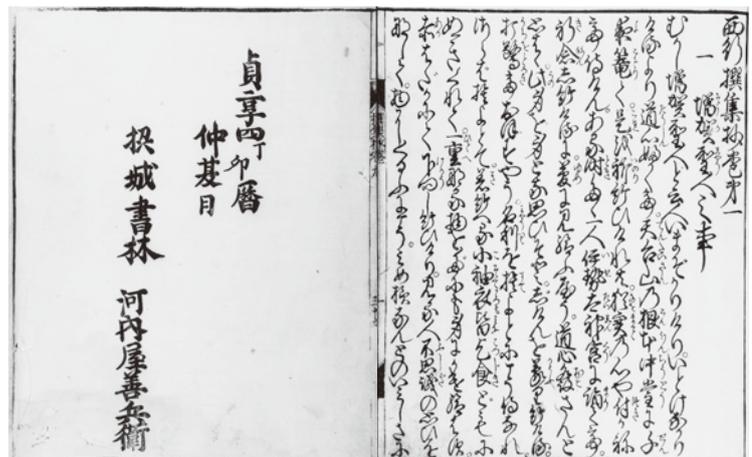
[8] 『撰集抄』(小林 - 124)

版大全 9 卷 9 冊合 3 冊(26.0×18.3)。原題簽(左肩双边)外題「清書 / 新板撰集抄」(3冊目は題簽欠)。序題・目錄題・内題・柱題「撰集抄」。卷首「西行記」。慶安4年8月、桑門無名子跋。奥書「此書有広略二本共行于世矣然而舛謬甚多今依広本聚数本加校讎以録諸梓間有風葉之可拾猶是足為正矣」。奥書左下蓮牌木記に刊記「慶安四年重陽吉 / 村上平楽寺刊行」。やや後印。四周单边11行。漢字かな交じり。原装墨色表紙、卍繫地に牡丹唐草(空押)。識語「信重」「良心」。本文は鈴鹿本系。*1651



[9] 『撰集抄』(小林 - 116)

版半 9 卷 9 冊合 5 冊(23.0×16.5)。原題簽欠。序題・柱題「撰集抄」。内題「西行撰集抄」。自序あり。最終丁裏に刊記「貞享四丁卯曆 / 仲夏日 / 撰城書林 河内屋善兵衛」。早印。四周单边13行。漢字かな交じり。挿画入り(画風より井原西鶴画)。原装濃色表紙、布目(型押)。印記「門外不許出入 / 西寺町超心寺住 / 深定室宣暢所蔵」「溪仙文庫」。本文は鈴鹿本系。*1687

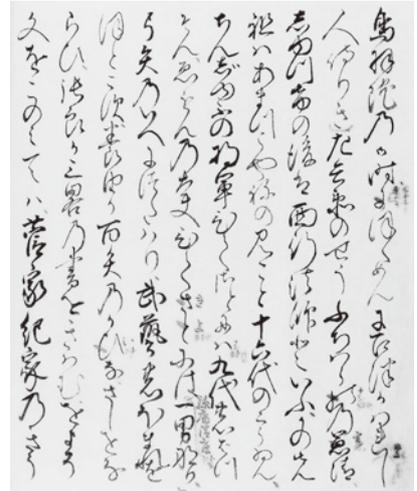


さいぎょうものがたり
『西行物語』

西行の一生を伝記的に描いた物語で、原形は鎌倉中期に成立か。鳥羽院の北面の武士であったこと、伊勢参宮・東国への旅、妻子の出家、花の下での往生など、西行をめぐる有名な逸話が並ぶ。事実を踏まえた上で、家集を中心とした和歌や詞書を説話風に改作し、信仰と数寄に生きる西行像を造形する。諸本は、写本・絵巻・奈良絵本・版本などさまざまな形態で伝わる。

[10] 『西行物語』(小林 - 44)

写大3巻合1冊(25.5×18.5)。後筆書題簽(中央無辺)外題「西行物語」。10行。漢字かな交じり。原装白地表紙、上半部に松葉散し(手描)、下半部に丁子横刷毛目、布目(型押)。印記「関場氏所蔵章」「関場氏所蔵/忠孝吾家之宝/経史吾家之田」「耕雨珍蔵」「家在鴨邨暗香疏景中」「名忠武字士举号椽屋」「梅屋」。朱書校合補注書入あり。巻末に朱書校合識語「天保十五辰年八月廿八日灯火に校合畢/遠山金四郎が蔵書をこひ得て丹筆もて異なるをしつげぬ/なほ同し年十一月朔日の夜ともしのもとにてあつさに乘りし本もて又校合す/源来章」。*近世後期写

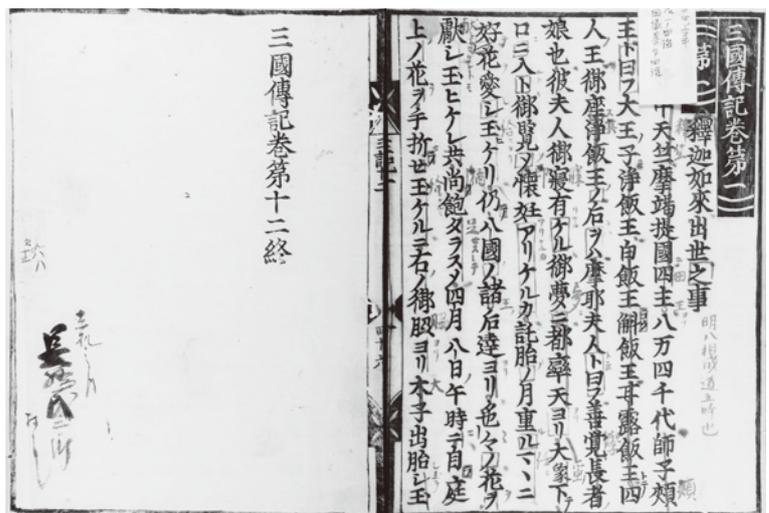


さんごくでんき
『三国伝記』

編者は天台宗の僧とされる玄棟。室町中期に成立。360編の説話を収める。インド・中国・日本の説話を巡の物語風に配列している。天竺僧梵語坊、大明の僧漢守郎、江州の遁世者和阿弥の三人の語り手が、因縁譚・孝養譚・報恩譚・高僧の伝記などの説話を語るという形式を取っているが、実際はほとんどの説話が先行作品からの書承説話となっている。漢文訓読調の技巧的な文体で、説話内容に評語を加えることは少なく、説話を客観的に捉え、知識の提供をしようとする姿勢が見られる。古い写本は国会図書館蔵近世初期写本と吉田幸一蔵断簡のみ。刊本は寛永14(1637)年刊・無刊記・明暦2(1656)年刊の3種があるが、版木は同一。

[11] 『三国伝記』(小林 - 9)

版大12巻12冊(27.5×18.2)原題簽(左肩双边)外題「三国伝記」(巻6のみ存)序題・内題「三国伝記」(陰刻)、柱題「三記」。序あり。序の巻首「沙弥玄棟撰」。巻2以下巻首「沙弥玄棟撰」。無刊記(最終丁裏には尾題のみあり、以下空白)早印。四周单边10行。漢字カナ交じり。原装褐色表紙。印記「偈寿印」(巻2のみ)・「連山人の」「小波選/日本口碑大全用書」。識語「十二札之内/長橋民二郎持之」。巻1・2と巻6前半に小林氏による朱書校合書入あり、巻2末に校合識語「昭和十五年八月二十日校合了」。初版本(最終丁裏尾題の後に刊記「寛永十四丁卯年仲春吉辰/洛陽五条橋通醜町/水得市助刊行」)の後印刊記削除版。更に後印本には最終丁裏の尾題を削除し、左側に双边枠内刊記「明暦丙申(2年)暮春吉旦/村上勘兵衛刊行」を追刻する(小林 - 10・11)。*近世初期刊

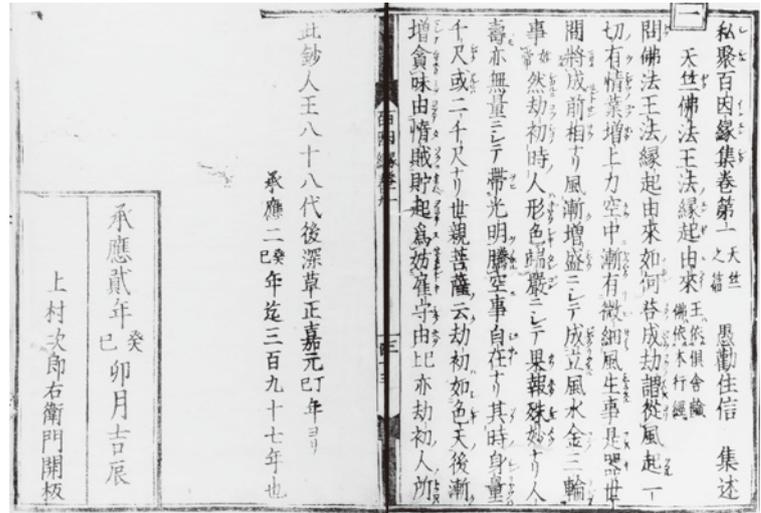


しじゅひやくいんねんしゅう
『私聚百因縁集』

住信編。衆生を教化・成仏のための因縁譚を集める。跋文によれば、正嘉元（1257）年7月に常陸国で成立。巻1～4が天竺編、巻5～6が唐土編、巻7～9が和朝編という構成で、三国それぞれに「王法仏法縁起由来」を説く。三国別の編成は『今昔物語集』『三国伝記』とも共通し、当時の世界観を反映する。浄土教的な傾向が強いことも、本書の特徴である。説話には出典を示すことが多く、原典を比較的忠実に踏襲している。承応2（1653）年刊本のみが伝わる。

[12] 『私聚百因縁集』（小林 - 23）

版大9巻9冊合2冊（25.5×17.7）。原題籤（左肩双边）外題「大/唐 百因縁集 五」「日/本 百因縁集 九」。序題・内題「私聚百因縁集」。柱題「百因縁」。序あり。巻首「愚勸住信集述」。奥書「此鈔人王八十八代後深草正嘉元丁巳ヨリノ承応二癸巳年迄三百九十七年也」。最終丁裏左下隅双边枠内に刊記「承応貳年癸巳卯月吉辰ノ上村次郎右衛門開板」（刊記入木）。やや後印。四周双边9行。漢文・漢字カナ交じり。原装薄縹色表紙。巻1取り合せ。*1653

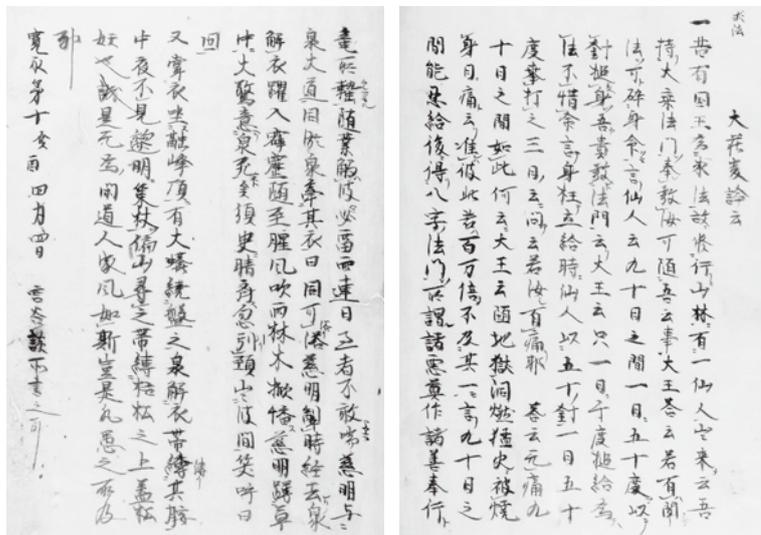


ひやくいんねんしゅう
『百因縁集』

小林文庫蔵写本が唯一の伝本。編者未詳。鎌倉中期以後の成立か。説教の資料集で、編者も談義にかかわる僧か。上下2巻（推定）のうち、現存しているのは上巻のみ。全56条。表記は変体漢文。上巻では、仏典に由来する説話を中心に、中国・日本の説話を交えて、仏法の靈験から日常の処世訓にわたる広範な教えを説く。観音・地藏・吉祥天女の靈験譚など、本書初見の説話もあって注目される。『今昔物語集』や『三国伝記』『私聚百因縁集』とほぼ同文の話を含むことは、三書の母胎となる共通の出典の存在を示唆する。上総国大網村の日蓮宗本國寺宮谷談所での書写本で、説教唱導の資とされた本らしい。

[13] 『百因縁集』（小林 - 36）

写大1冊（28.0×19.4）。上巻のみ存。目録題「百因縁集」。巻末書写識語「寛永第十癸酉四月四日 宮谷談所書之耳」。改装水色表紙。10行。漢文体。印記「本通寺什物」（墨滅）。*1633

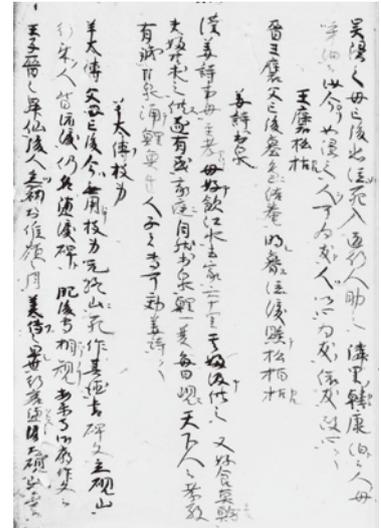
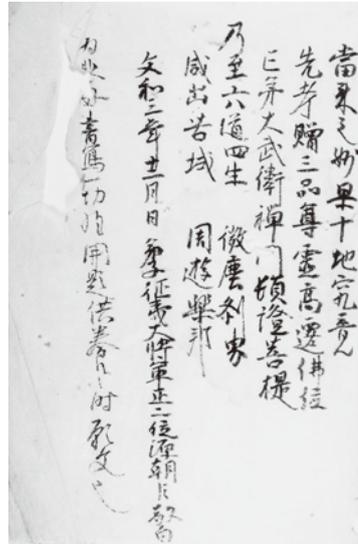


ないげいんねんしゅう
『内外因縁集』

小林文庫蔵写本が唯一の伝本。欠本か。冒頭7丁に高柴・郭巨・孟仁以下中国の孝子説話43条、続く2丁に兼通・逸勢女子・桓武天皇以下日本の孝子報恩説話8条を収める。末尾12丁に諷誦文・願文等の雑記あり、その中に文和3(1354)年の年記が見え、それ以降の成立。説話のうち29条が陽明文庫蔵『孝子伝』と一致することが指摘されている。説教のための覚書か。

[14] 『内外因縁集』(小林 - 28)

写半1冊(23.0×16.5)。共紙表紙紙縫綴。表紙中央書外題「内外因縁集 末」(本文同筆)奥書等なし。行数不定。漢文体、一部漢字カナ交じり。表紙右下に後筆の識語「照遠之」。*室町時代写

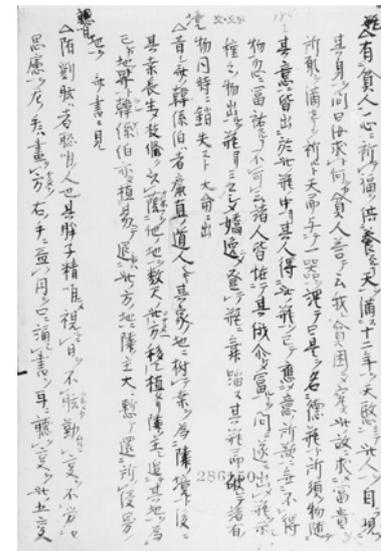
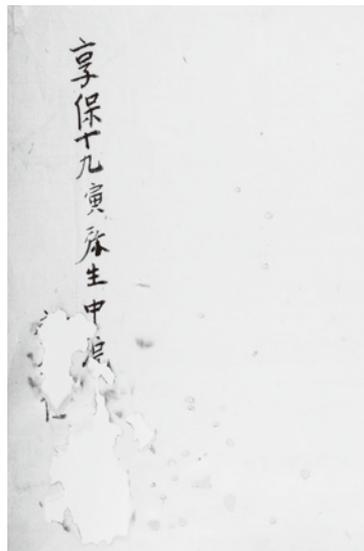


いんねんしゅう
『因縁集』

小林文庫蔵写本が唯一の伝本。編者不詳。天竺・震旦・本朝の仏教説話を集める。本文各条の冒頭に「観音」「靈夢」「仏像」など内容を摘記した見出しが付される。天竺震旦の説話には、末尾に出典を示すことが多い。本朝の説話は口承で伝わったものを書き留めたらしい。口語的表現が随所に見られ、談義説法に用いられた痕跡を残している。本朝説話中にある「寛文中」の年記から、原本は17世紀後半に成立したと推定される。

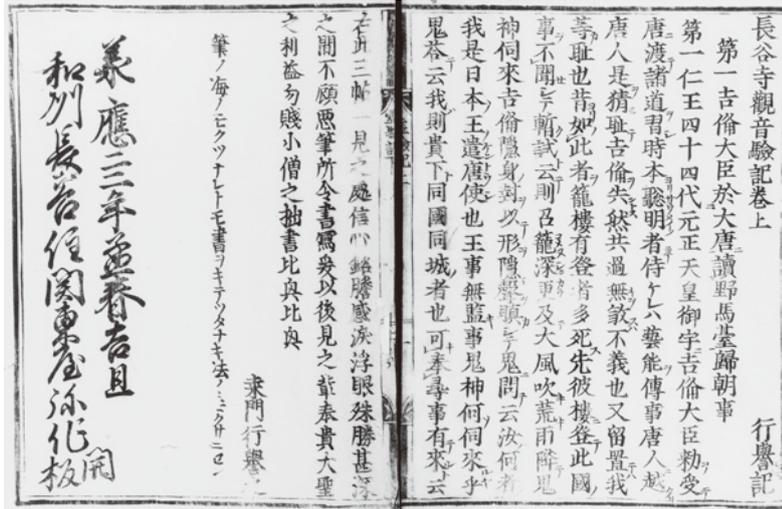
[15] 『因縁集』(小林 - 17)

写半1冊(23.6×16.9)。表紙左肩書外題「因縁集 全」(本文同筆)。内題なし。書写識語「享保十九寅弥生中浣」(破損)。13行。漢字カナ交じり。原装白茶色表紙。*1734



はせでられいげんき
『長谷寺靈驗記』

編者未詳。長谷寺に属する勸進聖の作か。長谷寺観音の靈驗譚を集めた説話集。上巻には観音の十九説法にちなみ長谷寺の旧記より19話、下巻（版本では中・下巻に分ける）には観音三十三身を表して諸家の記録より33話を収める。長谷寺が王法守護の寺であることを主張し、教導性が強く、人々に聴聞させることを念頭に編まれたもの。『日本靈異記』『今昔物語集』と共通の説話を収め、『三国伝記』にも影響を与える。



[16] 『長谷寺靈驗記』(小林 - 25)

版大3巻2冊(26.6×18.6)。書題簽「長谷寺靈驗記」。内題「長谷寺觀音驗記」。柱題「靈驗記」。卷首「行譽記」。奥書「右此三帖一見之処信心銘膽感淚浮眼殊勝甚深之間不顧惡筆所令書寫矣以後見之輩奉貴大聖之利益勿賤小僧之拙書比與比與 / 桑門行譽之 / 筆ノ海ノモクツナレトモ書ヲキテツタナキ法ノクサニセン」。卷末に刊記「承応二年孟春吉旦 / 和州長谷住開東屋弥作開板」(入木)。やや後印。四周双辺9行。漢字カナ交じり。原装水浅葱色表紙。識語「武陽 / 教算和尚」。
* 1655

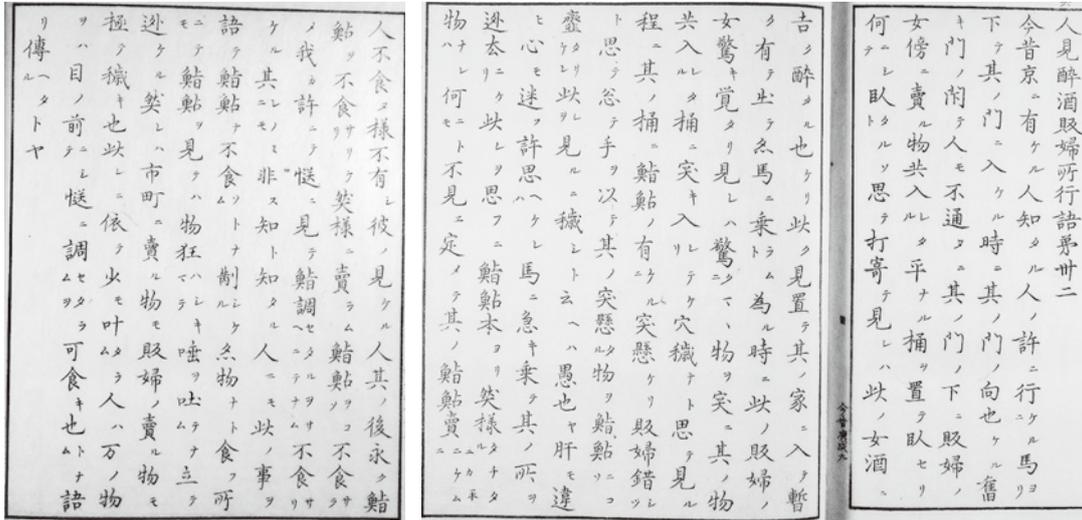
はせでらえんぎ
『長谷寺縁起』

著者を菅原道真に仮託する『長谷寺縁起文』を漢字かな交じり文としたもの。鎌倉時代成立。上・中巻で、道明の本長谷寺建立、藤原房前の協力と地藏・観音の助けにより徳道上人が十一面観音を造立したこと、下巻では、行基が山内を巡拝し、聖武天皇から帰依を受けたことを述べる。勸進に伴って、絵解きなどに用いられたものか。

[17] 『長谷寺縁起』(小林 - 27)

写半2巻1冊(23.6×16.5)。原装共紙表紙に覆表紙を付す。原表紙刷外題「大和国 / 長谷寺縁起 一冊」。内題・柱題「長谷寺縁起」。無刊記。四周短辺9行。漢字かな交じり。挿画入り。取得識語「昭和十五年八月中旬奈良市の古書肆にてとむ」。*近世前期刊(後印本)





〔注〕○物ヲ突(ツク)=へどを吐くこと。 ○忿テ=イソギテ。

○壺タリケレ=アヘタリケレ。かきまぜること。

有名な『今昔物語集』は近世中期に不完全な刊本が出るまでは世に流布せず、伝本も多くはありません。後世への影響力もさほどなかったことは日本の文学史の不幸でした。この話も他の説話集には見えない独自のものです。

この尾籠な話からも、さまざまな現実がわかります。まず、昼間からべろべろに酔っぱらう物売り女のいたことは、このような女性の社会的・経済的自立性を示唆します。何よりも当時の鮎鮎の形状から臭いまで、余すところなく物語ってくれます。実は食の実態については、近世の西鶴あたりまで下らないと本格的な描写は現れません。これなどは稀有な例というべきでしょう。

それから気づくことは、鮎売りの悪行の一部始終を目撃する男の視線が、周到に、微に入り細にわたり描かれていることです。さらにこの体験が男に如何に大きな衝撃を与えたか、後日談までが詳しく記されます。編者の興味が、もはや唱導や教訓の域を越えて、文学の世界へ大きく踏み出していたことを物語っています。

図版は幕末期に和歌山藩の御付家老で紀伊新宮城主、水野土佐守忠央が古書を発掘刊行した叢書「丹鶴叢書」所収版本([26])です。水野は政治的に辣腕を振るうとともに、集金力にも長けていたようで、とかくの噂もありました(喜多村信節著『過眼録』)。が、古書の収集と公刊は立派な文化事業というべきでしょう。

世俗説話の世界

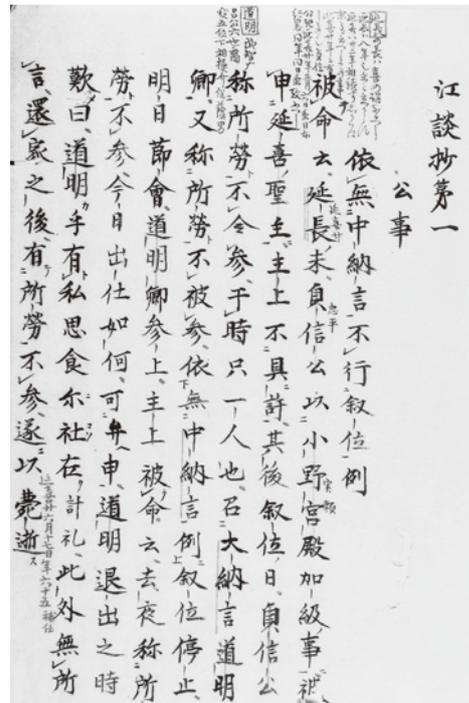
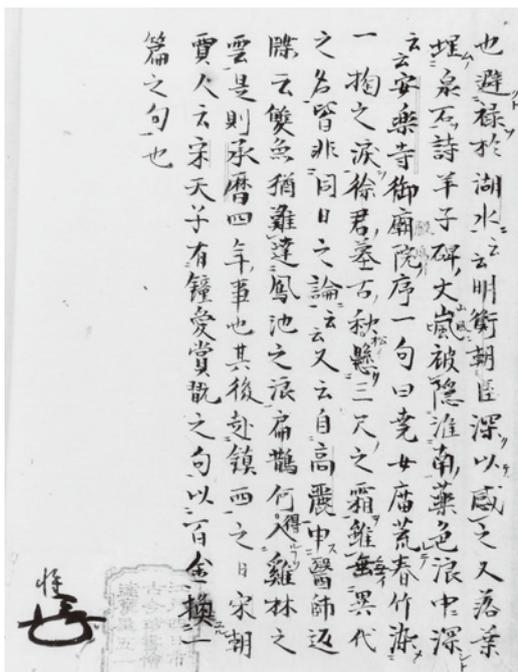
平安時代末期から鎌倉時代にかけて、新旧の価値観が混沌とする時代にあつて人生の道理を模索する中、次々と説話集が編纂されました。そこには宗教的な談義のみならず、知識人の談話や有名人の逸話、さらには世俗の人々の賢明な、また愚かな行動を活写した話が多く含まれています。それらは、説話を楽しみとして享受する人々の存在をうかがわせます。教理や道理だけでは割り切ることのできない人間の業が、説話の世界に深みを与え、より豊かなものとしているのです。

『江談抄』

院政期を代表する学者大江匡房^{まさむさ}の言談の聞書。聞き手は若手の俊才藤原実兼^{さねかね}とされる。成立年代は明らかでないが、匡房の最晩年長治元（1104）年から没年の天永二（1111）年に至る数年の言談を主としている。しかし、匡房・実兼没年後の年記を示す項も存在し、実兼以外の筆録者も存在したらしい。全体で450の言談が含まれ、有職故実や宮廷人としての知識の伝授の他に、貴族階級の人々についての逸話が多く含まれる。『今昔物語集』は本書から7話を直接に典拠としており、『古事談』や『古今著聞集』にも大きな影響を与えた。諸本は古本系とそれを分類・配列しなおした類聚本系に大別される。

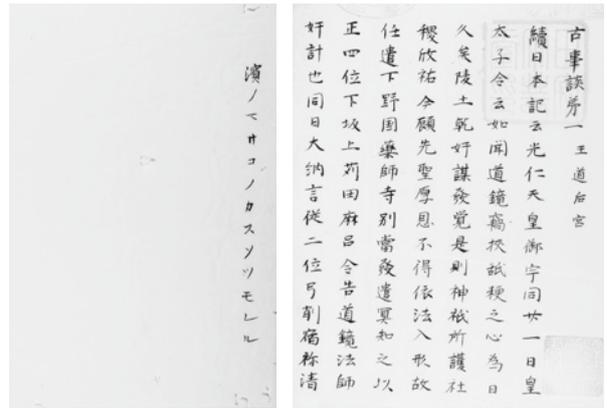
[18] 『江談抄』(小林 - 75)

写半5巻2冊(22.3×16.2)。書題簽(左肩無辺)外題「江談抄 一二」「江談抄 三四五(四・五は後筆)」。内題「江談抄」。巻3末に元書写識語「右江談抄巻第三以邑井氏家蔵本令書写者也ノ于時ノ宝永七庚寅歲初秋三七日ノ三枝益人今出川如難判」(巻1・2末にも同人の元書写識語あり)。巻4・5は別筆。11行。漢文体。原裝薄茶色表紙。印記「香山俊家珍藏」「杉園蔵」「江戸四日市古今珍書僧達磨屋五一」。巻3末に別筆の校合識語「元文五庚申歲暮春下旬校合畢 惟(花押)」(巻1・5末にも同人の校合識語あり)。書題簽に墨書「榊原香山先生校本」、榊原香山は伊勢貞丈門の故実家、寛政9年没64歳。*近世中期写



[22] 略本『古事談』(小林 - 81)

写大6巻6冊(27.0×18.9)。原題簽(左肩無辺、巻1は欠)外題・内題「古事談」。8行。漢文・漢字カナ交じり。原装濃緑色表紙。印記「聴松堂蔵書印」「田安府芸台印」「田藩文庫」。*近世中期写

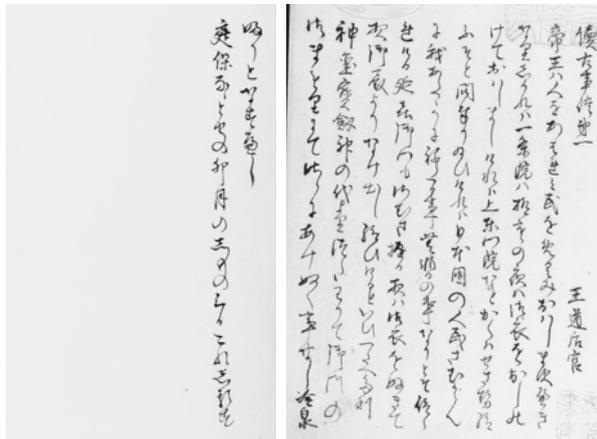


ぞくこじだん
『続古事談』

編者未詳。跋文によれば建保7(1219)年4月23日の成立(4月12日に承久に改元)。巻1「王道・后宮」、巻2「臣節」、巻3(欠巻)、巻4「神社・仏事」、巻5「諸道」、巻6「漢朝」の6巻編成。『古事談』と同じく諸書よりの抄出により成るが、宮廷の秘事を暴き立てるようなきわどさはない。王朝の衰退を悲嘆する態度が所々に見られ、巻6「漢朝」では規範とすべき政道に言及する。巻3を欠とせず「神社・仏事」とする5巻5部立て、巻2・3を共に「臣節」とする6巻5部立てとする諸本がある。

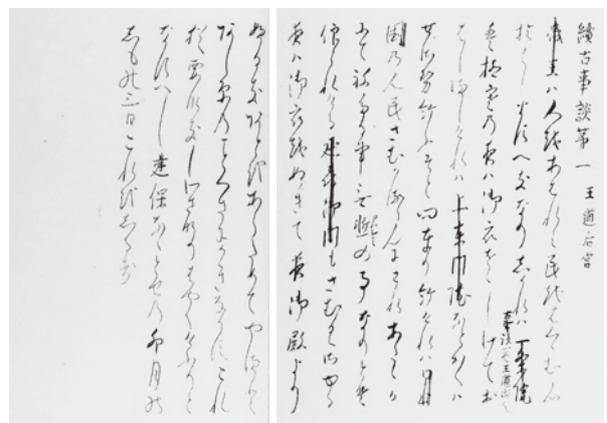
[23] 『続古事談』(小林 - 107)

写半5巻2冊(23.2×15.7)。書外題「続古事語」。内題「続古事談」。10行。漢字かな交じり。原装水色表紙。印記「狂歌堂文庫」(2種)。*近世後期写



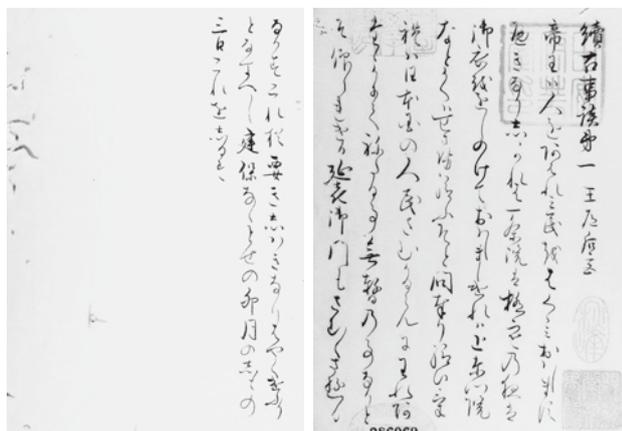
[24] 『続古事談』(小林 - 108)

写大6巻6冊(27.0×19.4)。刷題簽左肩双边「続古事談」。内題同。10行。漢字かな交じり。原装水浅葱色表紙。印記「亀井 堂儲書章」。*近世後期写



[25] 『続古事談』(小林 - 109)

写大5巻5冊(27.3×19.1)。原題簽(左肩無辺)外題・内題「続古事談」。8行。漢字かな交じり。原装濃緑色表紙。印記「秋峰」「聴松堂蔵書印」「田安府芸台印」「田藩文庫」。*近世中期写

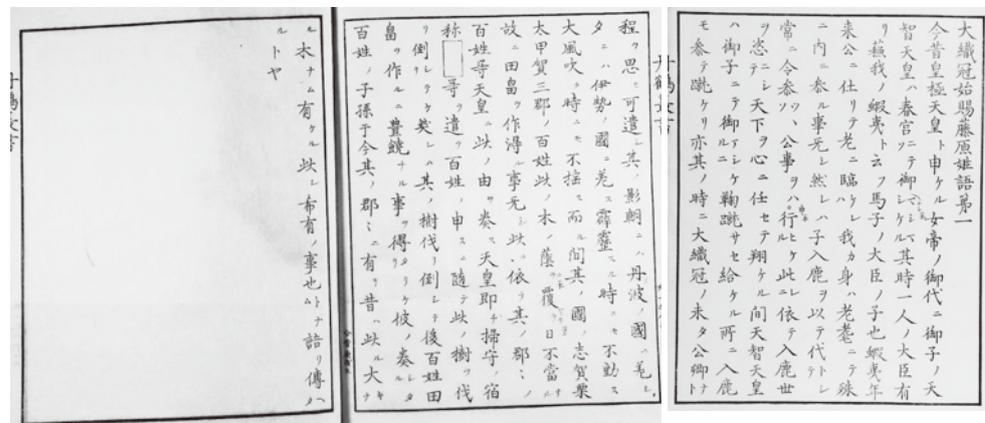


こんじゃくものがたりしゅう
『今昔物語集』

編者未詳。説話内容や依拠資料から、平安末期の1120～40年頃の成立と見られる。天竺・震旦・本朝の三部構成をとり、そこには他に類を見ない1040話という膨大な数の説話が収められている。仏教的思想を主軸にして編纂し、仏法を通して全世界を把握しようとする姿勢が見られるが、一方、仏法の範に収めることができなかつた世俗説話も多数含まれる。全巻の構成からは編集方針の厳密さがうかがわれるものの、その厳密さゆえに記述が不可能であったと思われる欠巻・欠話・欠文・欠語が見られ、未完成の様相を呈している。伝本は古態を残す古本系と、それ以外の流布本系に大きく分けられるが、いずれの系統も、鎌倉前期頃に書写されたと考えられる鈴鹿本を祖本としている。

[26] 『今昔物語集』(小林 - 53)

版大21冊(26.0×18.1)、巻22～31のうち巻23欠。原題簽(左肩単辺)外題「丹鶴叢書 今昔物語」。巻頭目録題下部に「庚戌(嘉永3)帙」。巻首「從五位下行土佐守源朝臣忠央輯刻」。四周単辺10行。漢字カナ交じり。原裝白茶色表紙、向い鶴の丸(空押)印記「時田圖書」。*1850



うじしゅういものがたり
『宇治拾遺物語』

編者未詳。建保年間(1213～1219)に成立か。仏教説話から尾籠話や民話までさまざまな説話を集める。性や食など、人間の欲望や本質に関わる説話も多い。あたかも劇を演ずるかのような、生き生きとした登場人物の所作や会話の掛け合いが、本書の魅力となっている。教訓や批評を話末に語ることも少ない。その編纂には、説話そのものを「物語」として享受し、楽しむ態度に満ちている。『今昔物語集』『古本説話集』『古事談』などとの間接・直接の伝承関係が想定される。

[27] 『宇治拾遺物語』(小林 - 142)

写大3冊(26.2×19.9)、後筆の書外題「宇治拾遺 上(中・下)」。内題「宇治拾遺物語第一 抄出之次第不同也」。12行。漢字かな交じり。原裝砥粉色表紙。不完本(2巻本の上巻を3分冊にしたもの)。*近世前期写

